

# 季報

二松学舎大学附属図書館  
Quarterly Report

三島中洲郎

漢學塾二松学舎  
二松学舎専門學校  
跡

## No.117

2023（令和5）年11月

- P2 『第二の性』と『赤頭巾ちゃん気をつけて』と『失われた時を求めて』 増田裕美子
- P3 読書の秋 阿部和美
- P4～5 盛岡文学散歩 ～市街地編～
- P6 専門図書館紹介  
公益財団法人日本交通公社 旅の図書館
- P7 本学所蔵資料紹介 / 作家のおやつ巡り⑦
- P8 本学教職員著書紹介

# 『第二の性』と『赤頭巾ちゃん気をつけて』 と『失われた時を求めて』

文学部国文学科 教授 増田裕美子

私が子供の頃は、日本全体が貧しい時代で、娯楽も少なく、読書は子供にとっても欠かせないものだった。ただ本は貴重でそうそう買うことはできない。私はその頃東京都大田区に住んでいて、近くの区立洗足池図書館によく通っていた。また当時は定期的に家に来る貸本屋というものがあって、少女漫画雑誌の『りぼん』を読むのを心待ちにしていたものだ。

私が好きだったのは『赤毛のアン』や『少女パレアナ』といった翻訳物の少女小説である。その後高校生になると受験勉強が忙しくなり（その頃受験戦争というものがあつた）、読書どころではなくなったが、大学生になって読書の幅も広がった。私は2年間の教養課程を終えた後、教養学科フランス科に進学したが、そこでは当然ながらフランス語で様々な本を読む（読まされる）ことになった。学友たちとフロベールの『三つの物語』を原書で読む読書会を行ったりもした。

しかし私はどうもフランス文学になじめないところがあって、大学院は仏文ではなく比較文学・比較文化へと進学した。ある時、『自伝文学の世界』という本に寄稿することになり、私はフランスの作家シモーヌ・ド・ボーヴォワールの自伝を取り上げた。彼女は小説も書いているが、何よりも『第二の性』という著作で有名である。まだジェンダーという概念もなかった時代、『第二の性』の冒頭にある「人は女に生れない。女になるのだ。」という文章は鮮烈であった。社会的・文化的に作られる〈女らしさ〉の指摘である。こうした文化や社会が作り出す〈らしさ〉というものが、私が老いの研究を始めるきっかけの一つとなった。いわゆる〈老人らしさ〉というものが、文化的に作られたものではないかということである。（ちなみにボーヴォワールは『老い』という作品も書いている。）

学生時代は研究に関する本を読むのはもちろんだが、そのほかにもアガサ・クリスティーの本が大好きでほとんど読破した。日本語訳だけではなく、英語の原書やフランス語訳、イタリア語訳で読むこともあった。（これはミステリーを読むのが外国語

習得の方法の一つでもあるからである。）また数々の映像化されたクリスティー作品もよく見た。そんないささかのんびりと過ごした青春時代を言葉で説明するのは難しいが、一冊の本が当時の雰囲気伝えてくれるかもしれない。それが庄司薫の『赤頭巾ちゃん気をつけて』である。この本は大ベストセラーとなった芥川賞受賞作で映画化もされ、私も映画を見に行った。主人公は都立日比谷高校の三年生、薫くん。今やおとぎ話でしかない学生運動を背景にフツの高校生の日常（といってもある一日だが）を描いた作品で、私が大学に入学した時に学生運動の残党のような先輩がちらほらいたことを覚えている。

作品にも描かれているように、当時は専業主婦が当たり前で、家にいるお母さんが子供に電話を取り次ぐものだった。本のタイトルは最後の銀座の街角の場面に由来するが、銀座や旭屋書店といったものが今とは異なる牧歌的な空気感を醸し出している。そういうノスタルジックなものを感じる一方で、男の子が主体であることに物足りなさを感じる。やはり女の子や女性は添え物でしかなく、男の時代だったなと思う。

その後も無数の本に触れてきたが、最後にフランスの作家マルセル・プルーストの『失われた時を求めて』を紹介したい。二十世紀最大の傑作とも言われる全七巻からなる長編小説である。その第一巻『スワン家のほうへ』をフランス科の授業で読まれた時は、一つのセンテンスが長ったらしくて閉口した。幼少時代の思い出をたどっている文章なのだが、文章の読みにくさもあって、有名なマドレーヌの挿話も印象に残らなかった。しかし後々この作品を読み返すことになり、プルーストの人生が主人公の言う「内面の書物」としてこの作品に結実したことがわかり、感銘を受けた。

こうした人生哲学が作品の中に込められているフランス文学は、確かに私の人生に深く影響を及ぼしていると言えるだろう。

# 読書の秋

国際政治経済学科 講師 阿部和美

小学校の頃から、毎年秋になると「読書をしましょう」と校長先生からお話があった。が、秋だからといって読書がはかどった記憶はない。どうも晴れの日の多い秋は、トンボが舞う黄金色の田んぼに囲まれながら、走り回って遊びたくなくなってしまいう性分であった。私の出身地域には図書館がなく、町の公共施設に小さな図書室があったが、その児童書はほとんど読み尽くしていた。毎年夏休みに配られる児童書の注文用紙には、母が「いいよ」と言ってくれる最大限の丸を付けて、本が届くのを楽しみに待っていた。小学生の頃には、読書に豊かな記憶がある。

ところが、中学に入って部活動を始めると、あまり本を読まなくなった。受験勉強で読む論説や小説は知的好奇心をくすぐったが、好きな本を読むのは自制した。大学では文学部に入学したが、今度は講義に関連する本を読まなければ、と気ままな読書を自制した。そうして、読書を愉しむ時間をほとんど持たないまま青春時代が過ぎ去った。

そんな学生時代、読書を思い立つこともあったが、いざ本を読もうと思っても、何を読めば良いのか分からない。世間で話題になるような小説やミステリーは、あっという間に読み終えてしまって、コストパフォーマンスが悪く感じた。要するに、経済的に余裕がなかった私は、安くて読むのに時間がかかる本を求めているのである。結局、時代を経ても評価されている岩波文庫の近代文学にたどり着き、難解な、いや、味わい深い日本語をゆっくりじっくり堪能した。現在は、その頃よりも積極的に本を読もうという気持ちはあるが、何を読めば良いのか、という疑問を引き続き抱えている。

そんな私に強烈な印象を残した本を二冊紹介したい。一冊目は、あまりにも有名な『きけ わだつみの声』（岩波文庫）である。学生時代に、戦争の記憶や継承に関心があり、講義を受けたり様々なメディア資料を見たりしていた。しかし、この本は、それまでのどのような情報より深く心に突き刺さった。

学徒出陣によって戦地に赴いた学生たちが、書き

残した手記である。当時の私とほとんど年齢が変わらない、あるいは弟よりも年下の学生たちが、国のあり方を憂い、戦争の意義を問い、広い世界に飛び出そうとした矢先に眼前に迫る死をなんとか受け入れようとする。ある者は死を自分の使命と覚悟し、ある者は死を抗うことのできない時代の潮流と諦める。そして、ほぼすべての学生が、家族へ、母への感謝の言葉を贈る。選ばれた語句から、行間から、様々な葛藤や悔しさがあふれていた。子供の頃から小説を読むのが好きで、様々な空想をして過ごしていたが、本から滲み出る思いを感じたのは初めてであった。

二冊目は、『南の島に雪が降る』（ちくま文庫）である。俳優・加東大介が戦争体験を綴った作品である。私には俳優・長門裕之、津川雅彦の叔父、という方が馴染みがある。「ジャワは天国、ビルマは地獄、死んでも帰れぬニューギニア」と言われたニューギニアで、兵士たちの士気高揚のために劇団立ち上げを命じられた加東の体験記は、悲惨な戦争体験記というより、ユーモアも交えた青春奮闘記のようにも感じられる。

熱帯のジャングルで、極限状態に追い込まれてマラリアや栄養失調でバタバタと兵士が死んでゆく。そんな絶望的な状況の中で、舞台を作って公演を続ける劇団。病気で死が迫った兵士も、出撃前の兵士も、公演の間は浮世を忘れて笑い、泣き、喝采を送る。東北出身の部隊は、紙で降らせた雪を見て、出撃していく。ニューギニア戦線、という言葉でまとめられてしまうその場所にも、個人ではどうにもならない運命の狭間で必死に生きている人たちがいて、一人一人に顔があるということ、そして戦争がもたらすむごたらしさを痛感した作品である。私も東北出身であり、しかもインドネシアのパプア地域（ニューギニア島の西側）の研究を始めていたため、二重の意味でこの作品が心に残っている。

読書は、無限の想像や感情をかき立てる。澄んだ空気が気持ちの良い季節、読書を通して新しい世界の扉を開けていただきたい。



# 盛岡文学散歩 ～市街地編～



前号では石川啄木（1886～1912）が生まれ育った盛岡市好摩・渋民地区を紹介しました。今号では盛岡市街地にある文学史跡を巡ります。

まず、盛岡駅東口の正面に掲げられた「もりおか」の文字①は、啄木の自筆原稿から集字したものです。駅前広場には、東京朝日新聞で記者をしていたときに故郷を想って詠んだ“ふるさとの山に向ひて言ふことなしふるさとの山はありがたきかな”の歌碑②が建っています。



盛岡は、中心部に北上川・中津川・雫石川の3つの川が流れる川の街でもあります。中津川に架かる御厨橋のもとには、中津川を詠んだ「啄木父子の歌碑」③があります。碑には啄木の“中津川や月に河鹿の啼く夜なり涼風追ひぬ夢見る人と”と父・一禎の“中津川流れ落ち合ふ北上の早瀬を渡る夕霞かな”の歌が刻まれています。



下橋尋常小学校を卒業した啄木は、親戚の許に下宿しながら盛岡高等小学校（現：下橋中学校）へと進学し、そこで生涯の友となる金田一京助（1882～1971）や妻となる堀合節子と出会いました。下橋中学校の校門前には、啄木の“教室の窓より遁げてただ一人かの城址に寝に行きしかな”の歌と、啄木が晩年もっとも心を許し、その最期を看取った友人である若山牧水（1885～1928）の“城跡の古石垣にのみもたれて聞くとともになき波の遠音かな”の歌が刻まれた「石川啄木・若山牧水友情の歌碑」④があります。歌に詠まれているように、啄木は頻繁に学校を抜け出しては近くの盛岡城址公園で文学書や哲学書を読みふけていたそうです。



その盛岡城址公園には、金田一京助が揮毫した啄木の歌碑⑤ “不来方のお城の草に寝ころびて空に吸われし十五の心” があります。園内には他にも、盛岡中学校（現：盛岡第一高等学校）の11年後輩にあたる宮沢賢治（1896～1933）の詩碑「岩手公園」⑥もあります。



啄木や賢治が通っていた盛岡中学校は、1917年まで現在の岩手銀行本店の場所にありました。岩手銀行本店横の植込みには「盛岡中学校濫觴の地」として、金田一京助が揮毫した啄木歌碑⑦ “盛岡の中学校の露台の欄干に最一度我を倚らしめ” があります。また、隣接する岩手医科大学附属循環器センター前は、盛岡中学校の図書館があった場所で、“学校の図書館の裏の秋の草黄なる花咲きし今も名知らず”と詠った啄木の歌碑⑧があります。



1910年に竣工し、国の重要文化財に指定されている旧第九十国立銀行本店本館を保存活用した「もりおか啄木・賢治青春館」⑨では、啄



木と賢治の初版本をはじめ、ふたりの生涯や青春を育んだ盛岡の街を紹介するパネルなどが展示されています。

「下の橋」のそばには「賢治清水」⑩があります。これは賢治が盛岡高等農林学校（現：岩手大学農学部）在学中に、弟の清六と二人で下宿していた当時使用していた共同井戸を整備したものです。清水の隣には、盛岡の初夏の風物詩で、着飾らせた馬を引いて練り歩く祭り「ちゃんがちゃがうまこ」（ちゃぐちゃぐ馬コ）を詠んだ賢治の歌碑があります。

「い〜はと〜ぶアベニュー材木町」⑪には、児童文学の金字塔として今も読み継がれる賢治の『注文の多い料理店』を出版した光原社⑫があります。創業者・及川四郎は盛岡高等農林学校で賢治の1年後輩にあたり、光原社という社名は賢治が付けました。

啄木が1905年6月4日から妻・節子と両親、妹と共に暮らした「啄木新婚の家」⑬は、現存する盛岡唯一の武家屋敷で、随筆「我が四畳半」に当時の生活の様子が描かれています。しかし、そのわずか三週間後の6月25日には、啄木は中津川のほとりに転居します。そこは、岩野泡鳴・与謝野寛・正宗白鳥等が寄稿した文芸雑誌『小天地』を発行した地です。『小天地』は資金難により一号で終わってしまいます。翌年3月には代用教員として勤めるために故郷の渋民村に帰ったので、そこに住んだのもわずか9ヶ月ほどでした。現在は「啄木『小天地』発行所の跡」の解説板⑭が立っています。近くにある「富士見橋」⑮の欄干には、『小天地』の表紙絵に用いられたケシの花模様があしらわれ、親柱には啄木の歌“中津川や月に河鹿の啼く夜なり涼風追ひぬ夢見る人と”が嵌め込まれています。

今回紹介した他にも盛岡市街には啄木や賢治の歌碑が多く点在しています。木々と川に囲まれ、城下町の面影を残す盛岡に足を運んでみてはいかがでしょうか。



# 旅の図書館



観光の研究に役立つ  
資料を網羅的に  
揃えています

## どんな図書館？

公益財団法人日本交通公社が運営している観光分野の専門図書館です。戦前の旅行ガイドブックから最新の統計や研究資料まで、約7万冊の資料をユニークな分類で所蔵しています。

## どんな資料がある？

### 古書・貴重書

戦前の旅行ガイドブックやエッセイなど、約3000冊！



貴重書ギャラリーでは、テーマに沿った貴重書を紹介。手に取って見ることもできます。



### 時刻表・旅行パンフレット・機内誌

数十年分を並べると、注目される地域や物価の移り変わりが見えます。



### デジタルコレクション「旅」「ツーリスト」

戦前を代表する総合旅行雑誌で、紀行文やルート紹介だけでなく広告からも時勢が見えます。



### 観光研究資料

「観光地づくりのデザイン」「観光に関わる文学・紀行・作家」など観光像全体がつかみやすい分類。



### 各種統計・白書など

ゆったりした閲覧スペース。所属研究員も資料を利用しています。



図書館員さんより

学生さん歓迎します！  
ぜひ活用してください。

## 利用するには？

事前予約必要

**開館日** 月曜日～金曜日（10:30～17:00）  
※祝日・第4水曜日・年末年始を除く。詳細はウェブサイトを確認を。

**アクセス** 〒107-0062 東京都港区南青山二丁目7番29号  
日本交通公社ビル  
東京メトロ銀座線、半蔵門線、都営大江戸線  
「青山一丁目」5番出口から徒歩3分

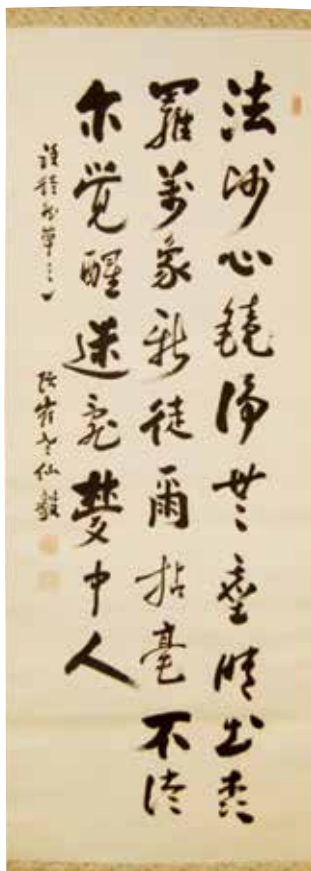
予約や開館カレンダー、蔵書検索はウェブサイトから。メールニュースに登録すると、新着図書や旅行動向の調査結果など最新情報が受け取れます。  
<https://www.jtb.or.jp/library/> ▶



## 本学所蔵資料紹介

### 三島中洲書幅 讀徒然草之一 明治四一年

三島中洲（一八三〇～一九一九）：本学創立者。  
 明治十（一八七七）年六月大審院判事を退職、同年十月漢学塾「松学舎」を設立。明治二十九（一八九六）年東宮侍講、明治四十五（一九一〇）年新帝（大正天皇）の侍講となる。大正四（一九一五）年宮中顧問官に任じられ、一等官に叙せられた。



法師心鏡浄無塵 法師の心鏡 浄くして塵無し  
 映出森羅万象新 森羅万象を映出して新たなり  
 徒爾拈毫不徒爾 徒爾に毫を拈（と）るは 徒爾にあらず  
 覺醒迷亂夢中人 覺醒す 迷亂夢中の人

兼好法師の心は鏡のように澄みきっていて、ほこりもなく清らかで、この世に存在するあらゆるものをあざやかに写し出している。徒然なるままに筆をとったことは、決して無駄ではなく、迷い乱れて夢見る人々の目を覚まさせたのである。

（石川忠久編 『三島中洲詩全釈』第四巻より）

## 作家のおやつ巡り⑦

「行きます。上野にしますか。芋坂へ行つて団子を食べませうか。先生あすこの団子を食べた事がありますか。奥さん一返行つて食つて御覧。柔らかくて安いです。酒も飲ませます。」<sup>※1</sup>

「芋坂の団子屋」として夏目漱石の『吾輩は猫である』に登場するのが、1819年創業の「羽二重団子」です。羽二重のようにきめが細かいことから名付けられた名物の羽二重だんごは、生醤油の焼きと漉し餡の2種類の味が楽しめます。

漱石以外にも、田山花袋・久保田万太郎・船橋聖一・司馬遼太郎らの作品にも登場します。また、20代で結核に冒された正岡子規が病に臥していた頃の日記『仰臥漫録』には、「[明治三四年]九月四日・・・間食 芋坂団子を買来らむ・・・あん付三本焼一本を食ふ」<sup>※2</sup>と書かれています。病床に伏しながら、四本も食べられるほどの美味しさは気になりますね。多くの文豪を虜にした味をご賞味ください。



※1 『漱石全集 第1巻』 岩波書店 1993年刊

※2 『仰臥漫録』 改版（岩波文庫） 岩波書店 2022年刊

## 本学教職員著書紹介

# 『平安文学を読み解く 物語・日記・私家集』

妹尾好信著  
(和泉書院、2023年3月刊行)  
A5判 400頁 10,000円+税  
ISBN 978-4-7576-1067-5



本書は、昭和59年(1984)から令和元年(2019)までの36年間に発表した平安文学とその享受に関する学術論文のうち、これまでに出版した単行本に収めなかったものと、研究余滴として記した学術的な短文や、さまざまな機会に依頼を受けて執筆した啓蒙的な文章、さらに講演の筆録などを集めて一冊にまとめたものです。

全体は、四章と二つの付章で構成しました。

「第一章『竹取物語』を考える」では、翁の人物像から『竹取物語』の主題と方法を考え、かぐや姫の昇天に関する記事を分析して、物語の中世改作説を仮説として提示しました。「第二章『伊勢物語』と歌物語の世界」では、二条の後、伊勢斎宮、惟喬親王等の物語の描かれ方から、『伊勢物語』の成立過程と制作意図について考察を巡らしました。「第三章 日記文学の読解試案」では『蜻蛉日記』の記事の新たな読解を試み、『紫式部日記』が書かれた意義などについて考えました。そして、「第四章 平安私家集の素描と読解」では、『千里集』や『中務集』を取り上げ、編纂意図の解明や本文の読解に注力しました。「付章一 平安文学の中世的展開についての短章」には、平安文学に題材を取った能・狂言など、中世における平安文学の享受に関する小考を、「付章二 文献資料の探索」には、各地の図書館が所蔵する古典籍の調査にまつわる話題を集めました。

総じて、平安文学を代表する作品がどのように成立し、どんなふうに享受されたのかを考え、また現存通行の本文をどう読解し、いかに校訂すべきかについて独自の見解を提示することに努めています。広島大学定年退職を機に出版したのですが、二松学舎大学に着任するにあたって名刺代わりになりたいという思いもありました。巻末に「著述・編纂物目録」を付載したのにも、そういう気持ちがかもっています。

文学部国文学科 教授 妹尾好信

### 編集後記

「季報」117号をお届けします。

今号では「読書の秋」をテーマに、2名の教員の本にまつわる思い出を紹介させていただきました。また、専門図書館紹介では「旅の図書館」にご協力をいただきました。

読書や旅で新しい情報に接すると、急に視界がひらけたように感じる場合がありますね。もっと深掘りしたくなったら、その情報を専門に扱っている図書館がなか探してみるのもおすすめです。(Sh)

二松学舎大学附属図書館

季報  
第117号

発行日 2023年11月1日

発行 二松学舎大学附属図書館

九段図書館 〒102-8336 東京都千代田区三番町 6-16

電話：03-3263-6364

柏図書館 〒277-8585 千葉県柏市大井 2590

電話：04-7191-8758

印刷所 株式会社 サンセイ